

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座4-13-11 文明堂3F
電話三五四一-1547 七一番

清元協会

目黒区南三-1-16
電話五七二六-0443 三番

財団法人 古曲会

中央区銀座六-六-三 新橋会館
電話三五七一-0216 六番

新内協会

新宿区神楽坂六-二十七
電話三三六〇-1804 四番

常磐津協会

世田谷区岡本一-三十二-一八
電話三七〇七-3763 三番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二-十一-十九-四
電話三五四二-1656 四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二-十五-十二-四〇三
電話三五八五-1991 一六番
(五十音順)

助成 東京都

芸団協・邦楽振興基金

ⒸCPR A(実演家著作隣接権センター)

平成十九年三月四日(日)

国立劇場小劇場

第一部 十二時開演 三時三十分終演

第二部 午後四時開演 七時三十分終演

2007 都民芸術フェスティバル 助成公演

第三十七回

邦楽演奏会

邦楽名曲選

2007都民芸術フェスティバル参加公演一覧

種目	演目等	開催日	開演時間	会場	主催団体	
オペラ	藤原歌劇団公演(字幕付き原語上演) オペラ「ラ・ボエーム」全4幕	1/26 1/27・28	18:30 15:00	Bunkamuraオーチャードホール	(財)日本オペラ振興会 03-5466-3181	
	東京二期会オペラ劇場公演(字幕付きドイツ語上演)リヒャルト・シュトラウス作曲 オペラ「ダフネ」全1幕	2/10 2/11	17:00 15:00	東京文化会館大ホール	(財)東京二期会 03-3796-1831	
	《ヤーザーガー》(オリジナル:能「谷行」)(字幕付き原語ドイツ語上演)台本:プレヒト / 作曲:ヴァイル 《井筒の女》(オリジナル:能「井筒」)(世界初演)台本:まえだ純 / 作曲:別宮貞雄	1/12 1/13	19:00 14:00 19:00	新国立劇場小劇場	東京室内歌劇場事務局 03-5642-2267	
		1/14	14:00			
オーケストラ	日本フィルハーモニー交響楽団	1/20	18:00	東京芸術劇場大ホール	(社)日本演奏連盟 03-3437-6837	
	東京シティフィルハーモニック管弦楽団	2/9	19:00			
	東京都交響楽団	2/15	19:00			
	新日本フィルハーモニー交響楽団	2/20	19:00			
	東京交響楽団	2/26	19:00			
	読売日本交響楽団	3/10	18:00			
室内楽	仲道郁代「室内楽の夕べ」	1/24	19:00	東京文化会館小ホール	(社)日本演奏連盟 03-3437-6837	
	「カットロ ピアチェリ」弦楽四重奏の夕べ	3/15	19:00			
現代演劇	「はちどりはうたっている」	2/7・8・9・13・16・17	19:00	紀伊國屋ホール	(株)劇団民藝 044-987-7711	
		2/10・11・12・14・15・18	14:00			
	ミュージカル「月のしずく」	3/17・19	19:00	俳優座劇場	(株)オールスタッフ 03-3583-9821	
		3/18	13:00			
3/20	15:00 19:00					
3/21	13:00 17:00					
バレエ	「ジゼル」	2/22・23 2/24	19:00 16:00	東京文化会館大ホール	(社)日本バレエ協会 03-3499-5525	
	モーリス・ベジャール生誕80周年記念特別公演(IV)東京バレエ団「ベジャールのアジア」	1/27・28	15:00	東京文化会館大ホール	チャイコフスキー記念東京バレエ団 03-3791-8888 (NBS)	
	「ロメオとジュリエット」	3/10 3/11	15:00 14:00	ゆうぼうと簡易保険ホール	牧阿佐美バレエ団 03-3360-8251	
現代舞踊	「かもめ食堂」「神聖なる喜劇」ほか	3/2	19:00	東京芸術劇場中ホール	(社)現代舞踊協会 03-5457-7731	
		3/3	14:00			
邦楽	第37回邦楽演奏会 義太夫・清元・古曲・新内・常磐津・長唄・三曲	3/4	12:00 16:00	国立劇場小劇場	邦楽連合会 03-3571-0216	
日本舞踊	第50回日本舞踊協会公演	3/27・28	11:00 16:30	歌舞伎座	(社)日本舞踊協会 03-3533-6455	
能楽	第47回式能	2/18	10:00 15:00	国立能楽堂	(社)能楽協会 03-5925-3871	
	普及公演	1/28 2/11	—	江戸東京博物館 八王子市芸術文化会館いちょうホール		
民俗芸能	第38回東京都民俗芸能大会	3/4・5	13:30	東京芸術劇場中ホール	東京都民俗芸能大会実行委員会 03-5211-7366	
	民俗芸能大会プレ企画 東京マラソンタイアップ事業	2/16・17・18	—	東京ドーム ほか		
寄席芸能	都民寄席	春風亭小柳枝ほか	2/10	14:00	羽村市生涯学習センターゆとろぎ	都民寄席実行委員会 03-5909-3080
	都民寄席	桂歌丸ほか	2/15	18:30	アミュールたちかわ	
	都民寄席	鈴々舎馬風ほか	2/25	14:00	東久留米市中央公民館	
	都民寄席	三遊亭圓歌ほか 澤孝子ほか(浪曲の会)	3/3 3/11	13:30 14:00	八王子市民会館 江戸東京博物館ホール	



「二〇〇七都民芸術フェスティバル」の開催に寄せて

東京都知事 石原 慎太郎

「都民芸術フェスティバル」は、優れた舞台芸術に親しむ機会を広く都民に提供するとともに、東京における芸術文化活動の振興を図るため、東京都が助成して開催するもので、今年で三十九回目を迎えます。東京の春を彩る行事として本フェスティバルを心待ちにしているファンも多く、今年は一月十二日から三月二十八日まで、都内各地で多彩な舞台公演が開催されます。

東京都では、平成十八年五月、今後の文化施策の基本となる「東京都文化振興指針」を策定し、世界が文化的魅力を感じるとともに、都民が文化的豊かさを誇ることができ、かつ文化創造の基盤が充実した「創造的な文化を生み出す都市・東京」を目指しています。

さらに、二〇一六年オリンピック開催に向け、成熟した都市の新しい可能性を世界に示していくつもりです。私は、都市の成長と成熟は、都市機能の拡大・充実だけでなく、住む人の地域への愛着や洗練された暮らしぶりによってもたらされるものと確信しています。

そのためにも、ひとりでも多くの皆様に、各会場で繰り広げられる多彩な舞台芸術を存分に堪能していただきたいと思います。そして、東京の優れた芸術文化がもたらす都市の力を未来に引き継いでいただくことを期待しています。

最後に、本フェスティバルに参加された皆様のご尽力に感謝するとともに、本公演のご成功と今後益々のご発展を祈念いたします。

第一部 番 組 (十二時開演)

一、 箏曲 明石

箏 鳥居名美野
 箏 中田名美妹
 箏 山下名緒野
 小林名与郁
 岡村名吉野
 渡部名佳野
 川野名郁謡

二、 河東節 七重八重花の葉

ななえ やえ はな しおり
 (花の葉)

浄瑠璃 山彦 ちか子
 同 山彦 幸子
 同 山彦 幸代
 同 山彦 ゆかり
 三味線 山彦 東子
 同 山彦 佳子
 上調子 山彦 朋代

三、 新内 傾城三度笠

けい せい さん ど がさ

梅川忠兵衛

浄瑠璃 富士松 魯遊
 三味線 新内 勝史郎
 上調子 鶴賀 伊勢一郎

四、 常磐津 願系縁苧環

ねがいのいとえにしのおだまき

(お三輪・御殿)

浄瑠璃 常磐津 和佐大夫
 同 常磐津 菊美大夫
 同 常磐津 和洗大夫
 同 常磐津 和香大夫
 同 常磐津 和英大夫
 三味線 常磐津 八百二
 同 常磐津 啓寿郎
 上調子 常磐津 祐二郎

五、清元

幻まぼろし

椀わん

久きゅう

浄瑠璃 清元 延初磨
同 清元 延洲寿代
同 清元 延清恵
同 清元 延佳月

三味線 清元 延秀喜之
同 清元 延祐幸
上調子 清元 延美雪

六、長唄

助すけ

六ろく

唄 杵屋 吉之丞
同 杵屋 君三郎

三味線 稀音家 六四郎
上調子 稀音家 祐介
笛 福原 百七

七、義太夫

伽羅めいぼく先代せんだい萩はぎ

— 御殿の段 —

政岡竹本 駒之助
千松竹本 綾之助
鶴喜代竹本 土佐子

三味線 鶴澤 津賀寿

(終演予定 午後三時半ころ)

第二部 番 組 (午後四時開演)

一、 箏曲 まゝの川かわ

三弦	辻本親登代	上田親智井	道又親み幸
朝武親百美	鷹野親弘華	大又親み悠	
岡崎敏優	中川敏裕	鮎澤和彦	
錦織親夕美	野口親芳	江藤敏典	
石田敏紀	小林敏弓	原武親鳳生	
米川裕枝			

二、 一中節

旅路たびじの篠懸すずかけ

浄瑠璃	宇治文舟	三味線	宇治文蝶
同	宇治紫仙	同	宇治紫行
同	宇治紫穂		

三、 新内 関取千両せんりょう幟のぼり

浄瑠璃	富士松	佐賀吉	三味線	新内勝鳳
			上調子	新内勝志壽

—— 稻川内 ——

四、 義太夫 伽羅めいぼく先代せんだい萩はぎ

政岡竹本朝重	三味線	鶴澤寛也
八汐竹本土佐恵		
崇御前竹本越孝		
千松竹本佳之助		

—— 政岡忠義まさおかちゅうぎの段 ——

五、清元

北州千歳寿ほくしゅうせんねんのことぶき

(北州)

浄瑠璃	清元	志寿子太夫	三味線	清元	志寿造
同	清元	一太夫	同	清元	美三郎
同	清元	國恵太夫	上調子	清元	美十郎

六、常磐津

戎詣恋釣針えびすもうでこいのつりばり

(釣女)

浄瑠璃	常磐津	文字太夫	三味線	常磐津	文字蔵
同	常磐津	初勢太夫	同	常磐津	齋蔵
同	常磐津	小文太夫	上調子	常磐津	菊与志郎
同	常磐津	二三太夫			

七、長唄

春興鏡獅子しゅんきょうかがみしじ

(鏡獅子)

唄	東音	本多貞子	三味線	東音	金子君
同	東音	前川誉公	同	東音	高橋尚子
同	東音	大森多津子	同	東音	渋谷薫
同	東音	小山孝恵	同	東音	いづみ
同	東音	松田全代	同	東音	三野村千枝子

囃子

小鼓	小鼓	島村聖子	福原百華
立鼓	望月庸子	望月太左衛門	望月太左衛門
大鼓	梅屋巴	梅屋巴	梅屋巴
太鼓	齐藤美	齐藤美	齐藤美

(終演予定 午後七時半ころ)

○一部の出演者に変更のある場合はお許し願います。

第一部

一、明石

「明石の曲」とも。北島檢校(？〜一六九〇)作曲の箏組歌。各流とも中組(中許)に分類されて伝えられてきた。平調子。『源氏物語』の「明石」の巻を中心に、須磨に流された源氏が、明石に移り住んでから、明石の上と結ばれ、のち都へ帰ることとなった喜びまでを六歌に綴る。内容の統一がとられており、題名にふさわしい曲である。

二、七重八重花の栞(花の栞)

作詞者未詳。五世山彦河良作曲。文化九年(一八一二)三月八日、七世十寸見河東が柳橋万屋八郎兵衛方(万八楼)で一世一代の隠居披露をし、二世東雲と改名したときに初演された。江戸吉原の情景を詠みながら、末長く栄えることを願う。このころには、なにかといえは吉原のことを述べるのがきまりのようになっていた。したがってこの曲も、隠居披露には関係のない吉原のことを主にしている。現在は曲の前半三分の一ほどが失われているので、途中からの演奏になる。

三、傾城三度笠―梅川忠兵衛―

略称「梅川」。初代鶴賀若狭掾作曲。成立年未詳。正徳元年(一七一二)以前に初演された近松門左衛門の「冥途の飛脚」から脚色されたもの。大坂の飛脚問屋亀屋の養子忠兵衛は、新町の遊女梅川と馴染み、ついに三百両の封印切りの大罪を犯し、梅川とともに忠兵衛の故郷の新口村まで逃げたが捕えられる。その改作には一中節、宮蘭節、常磐津、清元などがあり、人気のある題材となっている。

新内のこの曲は「冥途の飛脚」を菅専助、若竹笛躬らが改作した義太夫節の「傾城恋飛脚」(安永二年一七七三初演)から、その下の巻をさらに脚色したものである。

忠兵衛の故郷新口村まで逃げてきた二人は、よそながら親の孫右衛門に別れを告げる。

四、願糸縁苧環(お三輪御殿)

宝田寿助補作、岸沢市造作曲。天保四年(一八三三)七月、江戸河原崎座上演の「妹背山婦女庭訓」の道行の場で初演された。当時の約束で義太夫狂言が上演される時には、その道行は豊後系浄瑠璃(常磐津、富本、清元)ときまっていたので、それにしたがったもの。四段目の切にあたる。

大和の国三輪の里の杉酒屋の娘お三輪は、烏帽子折の求女(実は藤原鎌足の息子淡海)と深く言い交わしていたが、入鹿大臣の妹橘姫が横恋慕して求女を連れ去る。お三輪は求女を尋ねるため、着

物の裾に苧環おたまきの糸を結び、そのあとを追って、はからずも三笠山の入鹿の御殿にたどり着く。そこで意地悪な奥女中たちに囲まれ、いろいろといじめられる場面。花聾（求女）を見せてやるからと、さんさんにもてあそばされる。とくに「竹に雀」の馬子唄を唄うところがきかせどころになっている。

五、幻椀久

岡村紫紅作曲、五世清元延寿太夫作曲。大正十四年（一九二五）四月、新橋演舞場の落成を祝った第一回東会あずまかいで初演された。椀久とは延宝（一六七三〜八〇）のころの大坂の豪商椀屋久右衛門（久兵衛とも）のことで、新町の傾城松山に馴染み、豪遊の果て座敷牢に入れられ、のち発狂して死んだという。この実説に基づく作品が多数あり、義太夫節、一中節、長唄、常磐津などに脚色されて「椀久もの」という分類がなされている。男性の狂乱ものの代表的な主人公。清元のこの曲では、狂乱した椀久が幻の中で松山に逢うという趣向に、座頭の菊市が登場するのが特色。

六、助六

三世桜田治助作詞、十世杵屋六左衛門作曲。天保十年（一八三九）三月、江戸中村座で初演された四世中村歌右衛門の八変化舞踊「花翫はなごよみ曆色所八景」の一つ。歌舞伎十八番「助六由縁江戸桜」の出端でで使われる同名の河東節をもとに舞踊化した作品。したがって河東節の影響が強い

いが、それを巧みに長唄にしている。「傘さして」「この紫の鉢巻は」「せくなせきやるな」あたりに河東節の雰囲気であらわれている。なお前弾と置唄「咲き匂う…」は、のち安政四年（一八五七）に再演された時に追加作曲されたと伝える。

七、伽羅先代萩—御殿の段—

通称「先代萩」。時代物。九段。松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸らの合作。天明五年（一七八五）一月、江戸結城座で初演された。万治〜寛文年間（一六五八〜七二）におきた仙台伊達家の騒動を題材にしたもので、先行作品の歌舞伎「伽羅先代萩」と、歌舞伎と浄瑠璃の「伊達競阿国おくにかぶき戯場」をもとに脚色したものの。歌舞伎のほうが先にできた珍しい作品である。とくに「御殿」といわれる六段目「政岡忠義の段」がよく知られ、歌舞伎での上演も多い。今日はその「御殿」を昼夜に分けての演奏になる。

幼君足利鶴喜代（鶴千代）君の毒殺を恐れた乳人政岡は、男性の面会を断り、わが子千松とともに守護している。そこに度会銀兵衛（仁木弾正）の妹八汐が来て、政岡を罪に落とそうとするが、信夫しのぶの庄司為村（田村右京）の妻沖の井のさばきと、若君の毅然たる態度に救われる。今日の演奏はここから。政岡が食事の支度をしている間の若君と千松のやりとり、とくに千松の「お腹がすいてもひもじうない」はよく知られている。（括弧内は歌舞伎での人名）。

第二部

一、ままの川

「儘の川」とも。京風手事もの。宮腰夢蝶ゆめちよう作詞、菊岡検校（一七九二〜一八四七）作曲、松野検校（一八〇二〜七一）箏手付。「ままの川」とは、どうしようもなくなつて、物ごとを成り行きのままにほうっておくときに言う言葉。「ままよ」に同じ。思ひ川、妹背の川、儘の川と並べ、その縁語を綴つて遊女の恋を歌う。歌詞の中に作詞者の名が詠みこまれている。三弦さんげん上り。箏平調子。冒頭部分が義太夫節「壺坂靈驗記」の「沢市内の段」の初めに用いられている。

二、旅路の篠懸

初世宇治紫文齋作曲。作詞も同人か。嘉永三年（一八五〇）ごろにできたものらしい。能「安宅あたか」から脚色したものだ、一中節にはこれ以前、同じく能「安宅」から「安宅道行」と「安宅勸進帳」とが作曲されている。これは長唄「勸進帳」の成立に大きな影響を与えた。ともに一中節菅野派に伝承されているが、本曲は初世宇治紫文齋が宇治派のために新たに作曲したものの。菅野派の「安宅道行」は比較的短い、それに義経が追われる身を嘆くぐだりと、そ

れを聞いた弁慶が、一の谷での勝ち戦を物語り、やがて兄弟の仲も直るだろうと慰め、一同を上げますぐだりを加えた。一中節としては新しい作品になるが、宇治派らしい柔らかさの中に、激しい物語もあり、宇治派を代表する名作として喜ばれている。なお「曾美加久堂そみかくだ」とは修験者あるいは山伏のこと。

三、関取千両幟——稲川内——

略称「千両幟」。初代鶴賀若狭掾作曲とされてきたが、鶴賀二代家元鶴吉（女性）の作曲らしい。原拠は明和四年（一七六七）八月、大坂竹本座で初演された義太夫節「関取千両幟」（近松半二、三好松洛、竹田文吉らの合作）で、その二段目の「稲川内いねがわ」（髪梳かみすき）と「相撲場」を新内に脚色したものの。もとの義太夫節は、当時大坂で人気の高かった稲川と千田川をモデルに、先行作の「双蝶ふたちょう々々曲輪日記くるわにっき」の趣向を取り入れて、力士の立て引きを中心に複雑な筋が展開するが、やはり二段目もつとも知られている。

稲川は二百両の金の工面に悩んでいた。今日の鉄ヶ嶽との取組にわざと負けてやればいいのだが、それはできないで悩んでいる。そんな大事な話を話してくれないので、女房のおとわは不満である。髪を梳きながら「相撲取を夫に持てば」以下のクドキになる。これは後に逆に義太夫節に取

り入れられた。今日の演奏はここまで。このあとは、相撲の取組が始まり稲川が危うくなってきたとき、二百両の進上金が読み上げられるので、稲川は勝つ。しかしその金は、女房のおとわが身を売った金であった。

四、伽羅先代萩―政岡忠義の段―

悪人方に加担する梶原平三景時（管領山名宗全）の妻栄御前が、頼朝公からの見舞いであるといつて、毒入りの菓子を持参する。千松がこれを食べて菓子折を蹴散らかすので、陰謀のあらわれるのを恐れた八汐が殺してしまう。目前でわが子を殺された政岡だが、必死で涙をこらえる。それを見た栄御前は、千松と若君を取り替えていたものと思ひ込み、陰謀を打ち明けて立ち去る。忠義のために殺された千松を「よう死んでくれた」と誉めながら、一人の母にもどつて嘆き悲しむ政岡の心情は胸を打つ。第一部の解説を参照されたい。

五、北州千歳寿（北州）

太田蜀山人作詞、川口直（なお。？）一八四五）作曲。文政元年（一八一八）開曲。北州とは江戸の北にあった吉原遊廓のこと。文化十三年（一八一六）に全焼した吉原が、ようやく再建されたのを祝う歌詞に、清元の繁栄を願う歌詞を加えている。初演した初世清元延寿太夫はこの時四十二歳で大厄、作詞した太田蜀山人は七十歳で古稀なので、延寿太夫の厄払いの意味もかねていたのかも知れない。内容は吉原の四季と年中行事を並べたものだが、蜀山人ならではの名文で、今ではわからない風俗を知ることのできる貴重な曲。「梅の春」と並ぶ代表曲で、祝儀曲として大切に扱われている。

六、戒詣恋釣針（釣女）

初世花柳寿輔の発案で、狂言の「釣針」を河竹黙阿弥が脚色、六世岸沢古式部が作曲、明治十六年（一八八三）十二月、花柳寿輔のおさらい会で初演した。その後平山晋吉が加筆してこの曲名とし、明治三十四年（一九〇一）七月東京座で、常磐津と岸沢の和解の記念披露曲として上演された。

もとの狂言「釣針」は現行曲。西宮の恵比寿には鯛と釣竿はつきものだが、その釣針で嫁や腰元大勢を釣るといふ奇抜さがうけている。古い台本では醜女を釣るのは大名になっているが、それが太郎冠者になったのは、江戸中期らしい。妻を釣るとはまことに不真面目な話のように見えるが、古くは神仏に祈る「申し妻」という風習もあったし、男女の縁の不思議さを象徴しているものといえよう。なおこれは昭和十一年（一九三六）に文楽にも移されている。

七、春興鏡獅子

福地桜痴作詞、三世杵屋正次郎作曲。明治二十六年（一八九三）三月、東京歌舞伎座で九世市川團十郎が初演。團十郎が自分の娘が稽古していた「枕獅子」を、自ら舞台で踊りたいと思ひ、桜痴に依頼して、傾城を大奥の小姓に書き換えたもの。前半の小姓弥生の女方の舞踊と、後半の獅子とが対照的で、舞踊の大曲として歌舞伎の重要な演目になっている。新歌舞伎十八番の一。

千代田城（江戸城）には、正月七日のご祝儀として、各大名から紅白の鏡餅が献上された。当時は正月六日を年越しといい、七日正月を祝う風習があった。献上された鏡餅をズリという板に乗せ、細引で曳いて歩く行事を「お鏡曳き」といった。この曲では、將軍の所望によつて、小姓の弥生がお鏡曳きの先導をする獅子頭を持ち、「石橋」の所作事を踊るといふ設定なので、題名も「鏡獅子」としている。

今日は時間の都合で大幅な省略演奏になっていることを御了承願いたい。

▽歌詞の中に今日の人権意識に照らして一部不適切な語句がありますが、古典の作品をそのまま演奏いたしますため、そのままにしたことをお許し願います。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそおでかけ下さりまして、ありがとうございます。何かと不行き届きの点もございました。お許しを願ひまして、どうかごゆつくりとお楽しみ下さいませよう、お願いを申し上げます。

今までは、このようにしてまとめて御鑑賞していただく機会は、少なかったように思います。その少ない機会を大切にしようと、出演者も一生懸命でございます。これからも、どうか続けて邦楽に変わらぬ御支援をいただけますように、お願い申し上げます。

来年も同じくここ国立劇場小劇場で、三月八日(土)に開催する予定でございます。番組がきまり次第、御案内をお送りいたしますので、はさみこみのアンケート用紙に、おとところ、おなまえをお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おきき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願い申し上げます。

ありがとうございます。